

都市部における民俗的信仰実践と神社—愛知県名古屋市における安産祈願を中心に—

Folkloristic beliefs and practices related to Shinto Shrine in Urban area : A case study on ritual practice for safe delivery in Nagoya city, Aichi prefecture

ムカルジー・ヒヤ

Hiya Mukherjee

Abstract

Childbirth rituals are considered to be one of the important rituals of *Rites of passage*. In any nation or society, rituals and ceremonies associated with Childbirth have undergone many changes with the passage of time. In Japanese society, traditional Childbirth rituals and its customs have embraced many changes not only in the countryside even in the urban areas with the massive advancement of medical treatment or the transition of an Era. The purpose of this paper is to examine the present practice of *Anzankigan* ritual (a prayer for safe delivery), which is usually performed during the fifth month of pregnancy for ensuring safe and healthy delivery of a newborn. Particularly, this paper will try to find out the practice of *Anzankigan* ritual in an urban area, by the case study conducted at Shinto Shrines, like *Shiogama* Shrine and *Inu* Shrine situated in an urban area of Nagoya, which are believed to be the most sacred places to offer prayer to the *Kami*, in order to be blessed with safe childbirth. While investigating the present practice of *Anzankigan*, this paper also aims to emphasis on several important aspects, such as historical origin of these two Shrines, how do these Shrines are closely associated with the concept of safe delivery, why these Shrines are so popular among devotees for offering prayer to ensuring safe childbirth and what is the present practice of *Anzankigan* in an urban area, where hospital delivery is the most popular choice of pregnant women. Through the case study conducted at *Shiogama* and *Inu* Shrines in Nagoya city, this paper will not only investigate the present practice of *Anzankigan* ritual, it will also make a comparative analysis on similarities and differences in the other practices and customs, such as receiving an auspicious *Hara-Obi* belt for tying the belly and receiving an amulet or lucky charm for ensuring the safe and healthy delivery. Finally, this paper will help to understand in what way the traditional practice of *Anzankigan* and other essential customs performed during the fifth month of pregnancy, are still continuing in the present day urban city of Nagoya.

キーワード：安産祈願、愛知県名古屋市、都市部、塩竈神社、伊奴神社

Anzankigan, Aichi Prefecture (Nagoya city), urban area, *Shiogama* Shrine, *Inu* Shrine.

1. はじめに

子どもの安産と健やかな成育は古今東西、人類に共通する願いである。日本でも、安産と成育を祈願する習慣と信仰が存在するが、本稿はなかでも安産祈願、それも神社仏閣に関わるものを取り上げる。安産祈願を含めた産育儀礼は、主として民俗学の分野で関心を集めてきたが、近年では病院出産が一般化していることもあり、産婦人科が抱える課題など、医学や衛生学分野の研究が増加しつつある一方、民俗学的な調査研究はそれほど盛んではなくなっている。しかし、病院出産が一般的になった今日でも、例えば塩釜神社や伊奴神社などを参拝する妊婦を目にする機会は多く、お守りや腹帯なども相応に売れている。そこで本研究は、安産祈願と関連のある神社仏閣の役割、関連しておこなわれる儀礼の実態、とくに最新の医療設備を備えた病院での出産が一般的な、大都市部における実態を報告するとともに、現代都市部における民俗的信仰実践について考察する。

2. 先行研究と問題提起

安産祈願を神社仏閣との関連において考察した先行研究は相応にある。例えば田口祐子は、「安産祈願の実態と動向—新宿区中井の御霊神社の事例から」において、近年の安産祈願の動向と変化などについて、東京都新宿区中井の御霊神社の事例を取り上げて、その神社と安産祈願の関連、戦前から現在にかけての都内における安産祈願の動向を明らかにした（田口 2010）。内藤美奈は、「対馬の産育儀礼（1）右近様—厳原町の安産祈願」において、長崎県下県郡厳原町に安産祈願と深く関連のある仏閣「成相寺」で祀られる「右近様」が、どのようにして島内の女性の信仰を集めるようになったのか、「右近様」に関わる伝説と安産祈願の関係について報告している（内藤 1998）。また、例えば金野啓史は「子安信仰の一考察—福島県大沼郡金山町大志の事例から」において、安産に関係があるとされる神社・仏閣、観音の地域的差異について報告した後、観音信仰が盛んな福島県大沼郡金山町の事例にもとづいて、子安観音講が同地域のみならず周辺地域の女性たちの安産祈願の中心になっていることを明らかにするとともに、子安信仰の形成過程とそれが果たす機能について考察している（金野 1996）。福尾美夜は、「安産祈願及びコンガラ様」において、岡山県下における安産祈願の際に貰う帯祝いやヘイシ除けの祈願と関連をもつコンガラ様について報告するとともに、牛窓紺浦のコンガラ様が安産祈願において期待される役割について明らかにしている（福尾 1994）。しかし、このような調査研究は、田口の研究をのぞいて地方、伝統的な慣習が比較的に残っているとみられる村落部でおこなわれる傾向が強く、都市部における産育儀礼、それも病院出産が一般的となっている今日の都市生活における安産祈願と産育儀礼の実態を記述、考察したものは皆無に等しい。しかし、本論文でみるように、都市部の女性たちは安産を祈願しなくなったわけではまったくくない。今日、戌の日には数多くの女性が神社仏閣を訪れる。安産祈願のお守りや腹帯なども売れている。病院と近代医療に関する知識の普及と民俗実践は、決して相反するものとして二項対立的にとらえるべきものではない。それでは、今日の都市部における安産祈願とはどのようなものになっているのだろうか。

一方、安産祈願に関わる民俗学的な基礎資料も相応に蓄積されてきているといえるが、名古屋市を含めた愛知県と中部地方に関する事例はほとんど報告されていない。全国各地の産育習俗を比較的網羅的に掲載している『日本産育習俗資料集成』でも、第二次世界大戦前に愛知県の知多郡、額田郡、中島郡、南設楽郡、北設楽郡、海部郡、丹羽郡などの地域において、妊娠習俗、新生児の安産の習俗、帯祝いの俗信、妊婦に課せられるタブーなどについて報告されているが、名古屋市の事例は報告されていない（恩賜財団母子愛育会 1975）。わずかに、『新修名古屋市史』に名古屋市における産育儀礼における在所の負担、妊娠中の生活、産婆の役割、出産の場や準備などについての一般的な報告がある（新修名古屋市史編集委員会 2001）ものの、安産祈願と関連のある神社の実態、産育儀礼にその神社の果たしている役割などについての記述はまったくみられない。

本論文の目的は、現在の都市部における安産祈願やそれに関わる民俗的な信仰の実態を報告するとともに、若干の考察を試みることである。本論文では、これまで名古屋市を対象とした安産祈願の研究が皆無に等しいことから、フィールドを名古屋市とすることとした。同市内で安産祈願と関連のある神社として今日では有名な塩竈神社と伊奴神社を事例として取り上げる。この両社はその成立の歴史や性格を異にしているため、両者を比較検討することにより、なぜこれらの神社が安産祈願の信仰を集める場所になっているのか、医療技術が進歩し、病院出産が当たり前となっている今日において安産祈願の実態とはどのようなものか、それらは伝統的な民俗世界において報告されてきた安産祈願と何らかの共通点および相違点があるのか、考察してみたい。本論文は、都市を対象とした民俗学に対しても、相応の資料的貢献を果たせるものと考えらる。

本論文が依拠する資料は、主に 2018 年の 12 月から 2019 年の 3 月にかけて、塩竈神社¹と伊奴神社²の宮司や神職を対象とした聞き取り調査によって得られたものである。聞き取りの際には、録音の許可を得て発言内容をすべて記録した。聞き取りにあたっては、民俗的な習慣や民間信仰について、それぞれの施設の特色をふまえつつ語っていただくように配慮したほか、その時代的变化についても意見を聴取するよう努めた。

3. 塩竈神社の事例—安産祈願と神社・事例 1—

愛知県名古屋市の天白区にある塩竈神社は、現宮司の山田氏によれば、宮城県の鹽竈神社の祭神である塩土老翁神（しおつちおじのかみ）の分霊を頂いて、およそ 1844 年から 1848 年にかけて建立されたものであるという。昔は交通の便が良くなかったため、当時の妊婦にとっては、伊勢神宮や鹽竈神社に直接お参りすることは難しかった。神社の祢宜や神職の話によれば、『古事記』や『日本書記』において塩土老翁神についての神話が記述されており、製塩や漁業をつかさどる翁とされている。しかし、この神と安産やお産との関連についてはとくに記述されていない。鹽竈神社と塩土老翁神が安産とどのような関係があるのかを解釈した押木耿介によれば、人間が生まれる際に、海潮が満ち潮になっていてこれが安産の時期であると考えられ、とりわけ人間にとって欠かせない必需品である塩と海潮が密接な関係にあることから、塩土老翁神が安産祈

願のご利益のある神様として信仰されるようになったという（押木 1972）。『古事記』と『日本書紀』では、塩土老翁神は塩筒老翁神、岐神、海路の神、事勝国勝長狭神という名でも呼ばれるが、安産祈願を求める人びとにとっては、この神は安産をもたらす神なのである³。

山田氏の語るところによれば、第二次世界大戦の前後に塩竈神社で安産の祈祷がおこなわれ始めたという。それ以前は、他の種類の祈祷のほうが多かったそうであるが、今日では、安産の祈祷が比較的多くなされるようになっている。現在では、安産の祈祷の希望者が一年間におよそ二万人程度であり、参拝者の七割か八割の方が占めている。安産祈願を希望する参拝者が、とくに戌の日にお参りするという点は昔も今も変わらないという。昔から、戌の日は日本社会において、産育儀礼を行うために縁起の良い日とされてきた。一般に、犬は多産であり、安産と考えられているのである。病院出産が当たり前となっている今日でも、妊婦は、妊娠が一応安定期に入ったと医学的に考えられるだ妊娠五か月目に、安産の祈祷をしてもらう。

現在、安産の祈祷が終わった後、妊婦には、1) 安産のお守り、2) 安産のお札、3) 安産のお塩、の三点が授与される。日本では、塩は清めの意味合いがあり、それを祈祷の次の日の朝、清らかな水と混ぜて飲むことにより、清らかな体で出産を迎えるようにという意味が込められているという。そして、桜の模様が描かれたピンク色の「安産のお守り」が授与される。いつ頃からピンク色になっているのか、なぜピンク色なのか、なぜ桜の模様が描かれているのか、という点を尋ねてみると、神職の酒井氏は、本社の塩竈神社の境内に美しい塩釜桜が咲き、それは日本の天然記念物になったが、桜と本社の塩竈神社の関係性にもとづいて、桜の柄が「安産のお守り」に描かれるように選ばれたのではないかと語った。また、ピンク色は、桜の色や女性の好きな色と関連しているのではないかと述べた。

さらに、安産祈願の際に欠かせない習慣として、腹帯祝いをおこなう為に腹帯をお祝いしてもらうことがあげられる。現在の塩竈神社においては、伝統的な腹帯として「お晒し」は存在するものの、現代の妊婦はベルトタイプやコルセットタイプのものを腹帯としてよく使うため、このようなベルトタイプやコルセットタイプの腹帯をお祝いしたり授けたりしている。ベルトタイプの腹巻は「いのり」で、コルセットタイプの腹巻は「ねがい」と名づけられている。その理由は、妊婦は安産祈願を求めて塩竈神社をお参りするので、「祈願」という漢字の一字ずつを取って、新しいタイプの腹帯に付けられたという。伝統的な晒（「おさらし」）もなくなったわけではない。晒は、岩のように丈夫な赤ちゃんが産まれるように意味合いが込められ、「岩田帯」と呼ばれている。妊婦が穢れていないということを意味するために、伝統的な晒の色は今も白色である。一方で、最近では色によって縁起がいいとか悪いとか考える思考はほとんど無くなってきたため、現代の妊婦は、安産祈願の際に、お祝いされるようにもってくるベルトタイプの腹巻は、多様な色になっている。

4. 伊奴神社の事例—安産祈願と神社・事例2—

名古屋市の西区にある伊奴神社は、六七三年頃に創建された。主に祀られている神様は伊奴姫神⁴、大年命、須佐之男命⁵である。その中で、伊奴姫神という女神は、子授け、安産・子供の成長を授ける神だとされている。伊奴神社の起源については諸説がある。例えば、伊奴神社の公式パンフレットによれば、昔、この地域の庄内川の氾濫により、周辺に住んでいた村人が困り、村人は旅の山伏に祈禱してもらった。その結果として、その年は洪水が起こらなかった。しかし、村人は、この出来事を不思議にと思い、開けてはならないと言われていた御幣の中には一匹の犬の絵と「犬の王」という文字が書いてあったことに気付いた。翌年、また洪水となつたので、再び立ち寄った山伏に、村人たちが御幣を勝手に開けていたことを打ち明け、再度の祈禱を依頼したところ、山伏は「御幣を埋め社を建て祀れ」といい、村人が言われたとおりにすると、その後は洪水がなくなり人々は助かった。ただし、他の説話は、六七三年前に第四十代第天武天皇の御代がここに来て、この地域から取れた稲を皇室に献上した際に伊奴神社が建立されたものだと伝えている（小林 2001）。

伊奴神社と安産祈願の関係についてであるが、『古事記』には、神活須毘神の娘である伊奴姫神が大年命と結婚したことが述べられている（小林 2001）。しかし、ここではとくに安産との関わりについての言及はみられない。神社公式の伝承によれば、洪水が起こらないように御幣に神聖な「犬の王」と一匹の犬の絵が描かれ、伊奴神社の始まりと動物の犬の果たしている役割から、祭神の伊奴姫神は、犬の多産のように、人間の妊娠の際に、無事に安産できるように祝福を与えているという。伊奴姫神と動物の犬の関係性について、もう一つの点に注目をしたい。伊奴神社の境内には犬の石像があるが、私は、妊婦がこの犬の石像の腹部を擦ってからその手で自分の腹部を撫でているのをしばしば目にした。「犬のように丈夫な赤ちゃんが授かるように」とのことであった。犬は安産の動物であり、妊婦には犬の力にあやかりたいという願望があるのであろう。また、伊奴神社が祀る伊奴姫神は犬の王と関係をもち、この神社はかつては村人を洪水から救ったとされる。このような奇跡譚もまた、安産祈願とどこかで関連しているのかもしれない。

伊奴神社と安産祈願の関係についてであるが、現宮司である稲岡氏によれば、創建当初から安産の祈祷がなされていたわけではなく、昭和三〇年（1955）頃から安産の祈祷がなされるようになったという。今日では、やはり妊娠五カ月目の戌の日に安産祈願のために参拝する妊婦が多いという。神社に安産祈願を依頼した際には、祈祷終了後、1) 安産のお札とお札立て、2) 安産のお守り、3) 安産の祈願絵馬（安産のことを願う絵馬）、4) 緑茶、5) 撒下神饌⁶、6) 初宮詣での際に撮る記念写真のための三千円の割引チケット、が授与される。お札をお札立てと一緒に渡す理由は、最近では都市部に住んでいる家族のほとんどが核家族であり、しかもマンションに住んでいる場合が多いので、自宅に神棚や仏壇を持っていない家庭を想定してそうしているという。安産のお守りは、伝統的には赤色であったが、今日では、妊婦の好みを考慮して桃色、水色、黄色の三色になり、犬のマスコットが採り入れられた可愛いデザインに変更されている。現実問題とし

て、お守りは伝統的なものよりも、親しみやすい、可愛いデザインのほうが妊婦に好まれるのだという。安産祈願の際に授与される腹帯については、「岩田帯」と呼ばれる白色の伝統的な晒しが占める割合は全体の一割程度にとどまっており、ここでも、マタニティベルトかコルセットタイプのものがより一般的となっている。

5. 考察

愛知県名古屋市の塩竈神社と伊奴神社の事例は、今日の都市部においても、安産祈願のために神社に参拝し、宮司や神職の祈祷を受け、安産のためのお守りや絵馬などを持ち帰るという慣習的行動が実践されていることを示している。ここで報告したふたつの神社の場合、妊婦はいずれも医学的に「安定期」に入ったと判断される妊娠五ヶ月目の戌の日を選んで、安産祈願にやってくるという点は共通している。そして、戌の日に参拝し、祈祷を受けるという行為が、多産かつ安産とされ、丈夫な子どもを産むとされる犬にちなんだものとして受け入れられていることも明らかになった。また、腹帯についても、ベルトタイプやコルセットタイプへとその形態を変えつつも、安産祈願の慣例のひとつとして受け入れられている。

一方、今日では安産祈願の神社として人気を集めているこのふたつの神社が、じつはその起源をたどると、必ずしも安産祈願とは関係していないということも明らかになった。塩竈神社はもととも宮城県の鹽竈神社本社から、祀られている神の分霊を頂いて、江戸時代末期頃に建築された。伊奴神社は、六七三年に建築されたとされるが、その起源譚は安産祈願と直接関係するような逸話や伝承は伝えていない。たしかに、伊奴神社が祀る伊奴姫神は犬の王と関係があり、この神社がかつて村人を洪水から守った際に、「一匹の犬の絵」と「犬の王の文字」が重要な意味をもったという言い伝えは存在している。しかし、このことは、ただちに安産祈願に結びつくということにはならない。

この点について私は、塩竈神社の場合、塩土老翁神は人間の生活にとって不可欠な塩と密接なつながりがあり、生活という点から人間の出産も司るととらえられているのではないかと考える。また、塩は穢れをはらう特別なものであり、これを飲むと清らかな身体で出産を迎え、流産の可能性を避けると考えられているのかもしれない。伊奴神社の場合は、先述したように多産かつ安産とされ、丈夫な子どもを産むとされる犬にあやかりたいという妊婦たちから、次第に信仰を集めるようになった可能性がある。いずれの神社の場合も、伝統的な文脈において宗教的な意味を付与されてきた「塩」と「犬」が、現代においても重要視されている。

興味深いのは、神社関係者の語りによれば、どちらの神社の場合も、安産祈願のための祈祷をするようになったのは昭和三〇年代、せいぜいさかのぼっても第二次大戦前後という、比較的新しい時代のことであるという点である。今回、その時期の神社を取り巻く社会的状況も含めて、なぜ安産祈願がその頃から盛んになったのかという点については調査できなかった。今後の課題としたい。

6. 結論と今後の課題

本論文は、愛知県名古屋市の塩竈神社と伊奴神社の事例をもとに、現代の都市部における安産祈願の実態について、主として神社側から得られた資料に依拠して報告してきた。その結果、医療技術が進歩し、病院出産が当たり前となっている今日の都市部において、依然として安産祈願は妊婦の習慣として相応に根づいていることが確認された。自宅出産がなくなり、都市部の生活様式ならびに拡大家族から核家族への推移の要因があっても、都市部において神社は、妊婦たちにとっての安産祈願の拠り所として、宗教的施設としての一定の役割を果たし続けているといえる。ただし、今回は紙数の都合もあり、塩竈神社と伊奴神社のみを取り上げたが、名古屋市において安産祈願と関連する他の神社仏閣を対象とした調査研究を継続する必要がある。その地域の特徴を考察するためには、名古屋市周辺の市町村はもとより、中部地方、そして全国の中に位置づけていかなければならない。

また、安産祈願をめぐる実践と意識については、妊婦を対象とした調査研究も必要であることはいうまでもない。これについてはすでに塩竈神社や伊奴神社に戌の日に来ていた妊婦の方々に対してアンケート調査をすすめており、神社や仏閣限らずに、名古屋市内の複数の子育て支援センターにおいて、子育て中の母親を対象とした聞き取り調査ならびにアンケート調査をすすめており、いずれ別稿で論じることとしたい。このようなアンケート調査とともに聞き取り調査の目的は、現代の名古屋市という大都市部に在住している妊婦や若い母親は安産祈願やそれに関わる儀礼についてどう考えているのか、現代においてどのような形として安産祈願がされるのか、安産祈願やそれに関わる儀礼の動向はどうなっていくのかが明確になろうと思われる。神社の宮司や関係する神職への聞き取り調査に限らず、妊娠の経験がある母親と出産を待っている妊婦向けの聞き取り調査を通して、愛知県名古屋市における安産祈願、それに関わる儀礼の実態と民俗的信仰がもっと明らかになってくると期待される。

7. 謝辞

本論文を終えるにあたり、特に現地調査にご協力いただきました塩竈神社と伊奴神社の宮司ならびに関係する方々に対して、厚く御礼を申し上げます。インタビュー調査の際に、神社ごとの貴重なお話を聞かせていただき、心の底から感謝申し上げます。

注

- 1) 例えば筆者は2018年12月14日と、2019年1月および2月の戌の日塩竈神社で観察すると、安産の祈祷を希望して参拝に来た妊婦を数多く確認できた。ほとんどの妊婦は、夫婦で、そしてしばしば両親とともに参拝に来ていた。戌の日の午前9時から12時半の間に数えただけでも、80組以上の妊婦を確認できた。病院出産が一般的化している現代の都市部で、この数字は決して少なくはないと考えている。
- 2) 私は2018年12月4日と15日の午後2時頃、神社の宮司である稲岡氏と、神職である小沢氏に聞き取り調査をおこなうために伊奴神社に行ったところ、15日の午後3時頃当日、安産のご祈祷や持参した腹帯のお祓いの依頼に来た5組の妊婦を観察することができた。宮司の稲岡氏の話によ

れば、戌の日と比べて、平日は安産祈願を求めて来る妊婦の数は少ない。しかし、戌の日には妊婦が大勢来るため、「当日は駐車場が非常に混雑して、車を止めるのは非常に難しい」ほどの賑わいであるという。

3) 「塩筒老翁神」・「岐神」・「海路の神」・「事勝国勝長狭神」は、「塩竈神社」の「塩土老翁神」（しおつちおじのかみ）の別の名で、『古事記』や『日本書紀』など出典により異なる。

「海路の神」の呼びかたは（かいろうのかみ）で、潮流を司るとされる。また、「事勝国勝長狭神」の呼びかたは（ことかつくにかつながさのかみ）で、『日本書紀』にこの名が言及されている。

4) 伊奴姫神は（イヌヒメノカミ）と読むが、この神様は大年神の御妃で、子授け、安産、生育の力を授けるとされる。

5) 「須佐之男命」について言えば、呼びかたは（スサノオノミコト）になり、日本神話の神である。伊奘諾尊（いざなぎのみこと）・伊奘冉尊（いざなみのみこと）の子供で、天照大神（あまてらすおおみかみ）の弟としても知られる。

6) 「撤下神饌」とは、神様にお供えした神饌の一部をお下がりとするもので、ご祈祷を受ける方々に配られるお菓子のことである。

参考文献

愛知県史編さん委員会（編）

2008 『愛知県史：別編』、愛知県、西濃印刷。

浅井金松

1983 『天白区の歴史』、愛知県郷土資料刊行会。

押木耿介

1972 『鹽竈神社』、学生社。

福尾美夜

1994 「安産祈願及びコンガラ様」、『女性と経験』、第19号、東京、女性民俗学研究会、pp.1-8。

金野啓史

1996 「子安信仰一考察—福島県大沼郡金山町大志の事例から—」、『日本民俗学』、第205号、東京、日本民俗学会、pp.84-94。

小林春夫

2001 『愛知の式内社とその周辺』、式内社顕彰会、鈴活印刷。

宮田登

1979 『神の民俗誌』、岩波新書。

水野時二

1987 『昭和区誌』、昭和区制施行50周年記念事業委員会、竹田印刷。

内藤美奈

1998 「対馬の産育習俗（1）右近様―厳原町の安産祈願―」、『女性と経験』、第 23 号、東京、女性民俗学研究会、pp.39-48。

恩賜財団母子愛育会（編）

1975 『日本産育習俗資料集成』、第一法規出版。

新修名古屋市史編集委員会（編）

2001 『新修名古屋市史』、第九巻、民族編。

田口祐子

2010 「安産祈願の実態と動向―新宿区中井の御霊神社の事例から」、『女性と経験』、第 35 号、東京、女性民俗学研究会、pp.100-110。

山田寂雀・西岡寿一

1983 『西区の歴史』、愛知県郷土資料刊行会。